

セコムが提案する EBM

多角的かつ深掘りした 経営分析データを提示し 現場の改善意欲を引き出す

関塚永一

セコム医療システム株式会社顧問
国立病院機構埼玉病院名誉院長
慶應義塾大学医学部客員教授

新潟県の上越医療圏における中核病院である新潟県立中央病院は、2019年より「セコムMASH」を導入、経営分析・改善に活用している。病院長をはじめ現場の医師や看護師、医療技術職も、深掘りされたデータをもとにさまざまな改善策を立案、実行しているのだ。

地域医療の要役が導入した 病院経営分析ツール

明治8年に高田病院として開業した新潟県立中央病院は、上越医療圏を中心とした地域の中核病院としての機能を果たしてきた。医療圏外からも患者が訪れ、医療連携先のリストには県内はもちろんのこと、隣接する長野県の医療機関も載っている。

「セコムMASH」で同院の患者さんの来院状況を見ると、半径は上越地区を越えて30km以上に及

ぶ。こうなると今後の医療連携のあり方も模索する必要があるだろう。同院のような地域の中核病院にとっては避けて通れない課題と思われる。

コロナ禍においても、従来の感染症病棟（6床）に加え専用病棟（54床）を開設。そのうち27床が重点医療機関の稼働病床に指定され、感染患者の受け入れに当たってきた。職員は地域医療の要役としての責任感が強く「この病院の機能が止まったら地域医療は立ち行かなくなる。絶対にクラスター

を起こさない」と声を掛け合っていたそう、この間、感染者はわずか1人のみだったという。

同院と「セコムMASH」の出合いは、前回も触れたように、同院の経営課医事企画員、服部智さんが、ある学会で自治体病院の導入事例を聴講したのがきっかけだった。3アカウントのみ使用できる形で試験的に導入したところ、長谷川正樹院長が高く評価したという。さらに、折から続く自治体病院の経営悪化について、県庁の病院局から対策を講じる「経

は本当にありがたかったです。他社のソフトも使ってみたのですが、自分たちで加工したり、資料づくり手間がかかったりと、どうしても業務負担が生じていました。そのうえ、操作そのものもわかりにくい。『セコムMASH』は分厚いマニュアルがないし、画面上で操作していけばどんどん深掘りされた情報が出てくるので、現場にあまり詳しくないスタッフでも使える点が魅力的でした」（服部さん）

実はこの操作の簡便性は、「セコムMASH」の大きな特徴である。これに限らず、こうした情報システムの運用は、専門スタッフ数人を配置したり、引継ぎもきちんと行ったりする必要があるという。ところがこの「セコムMASH」は、画面上の操作手順に

従っていくだけで、かなりの深掘りができてしまうのだ。県庁職員は数年で異動するが、それでも操作面に関しては苦にならず、使いこなしていくうちに知識も身についていくなど、公立病院特有の事情にも対応できるようになっているのだ。

得られるデータの主な配布先は、適宜開催される経営戦略委員会だ。病院全体の状況、各診療科の分析、入院料加算などに関する他院との比較などを示し、議論の材料としている。

そのほか、各診療科科長にA4用紙3ページほどの資料を毎月配布する。内科では呼吸器、消化器、血液、腎臓、内分泌関連の診療に関するデータといった具合に深掘りしたものを提示している。

DPC検証部会にも配布する。ある疾患を取り上げ、平均在院日数を他院と比べたり、出来高算定を下回った場合はその要因を分析したり、といった議論に役立てているそうだ。

そして長谷川院長だ。各部署に

配布する前に院長による確認作業があり、各科の状況を服部さんとともに見ながら、手術件数増減の詳細や入院患者の状況、その背景などを尋ねるメモを配布用資料に加筆しておくという。

この院長からの投げかけはとても大事だと、私も思う。今でも国立病院機構埼玉病院のレセプトチェックを行い、その差が大きい場合は要因についての情報提供を求めるようにしているが、直接的に診療に口出しはしないものの、現場側でも気にかけてくれるようになるものだ。

他院との比較についても熱心だ。現在、新潟県病院局、中央病院、新発田病院、がんセンター新潟病院で「セコムMASH」を導入しており、同院と同程度の病床数と医療機能を有する県立新発田病院と比較したり、がん診療についてはがんセンター新潟病院と見比べたりといったことも進めている。服部さんは「現場としては、比較対象が目に見える形で示されるので、改善にも取り組みやすい

新潟県立中央病院

上越市、妙高市、糸魚川市をカバーする上越医療圏の基幹病院として高度急性期医療を担い、同医療圏内での診療の完結をめざす。がん診療・小児周産期医療・救急医療の機能を充実させ、医療連携の拠点病院としても機能する。年間約4000台の救急車搬送受け入れがある。



所在地：新潟県上越市新南町205
電話：025-522-7711（代表）
病床数：524床（救命救急センター20床、急性期一般入院料1算定454床、小児病棟50床）
職員数：955人（常勤医112人、常勤看護師489人 2021年12月1日現在）

「セコムMASH」に白羽の矢を立てた理由として、服部さんは「使い勝手の良さ」を真っ先に挙げた。「傾向の分析やその要因など、モニターに表示されている図表がそのまま会議資料に使えるの

使いやすさと 深掘り可能な仕組み

「セコムMASH」に白羽の矢を立てた理由として、服部さんは「使い勝手の良さ」を真っ先に挙げた。「傾向の分析やその要因など、モニターに表示されている図表がそのまま会議資料に使えるの

ようです」と語る。

きちんと情報を提供すれば 身乗り出して聞いてくれる

病院、あるいは各診療科の経営分析については、長谷川院長に限らず、現場はとても協力的だと、服部さんは指摘する。病院の経営状況が悪化していることは十分認識しており、それを何とか改善したいという思いも強いようだ。「現場の先生方、看護師、医療技術職のほとんどは、『県立病院は赤字』と言われることに忸怩たる思いを抱いています。黒字化するには何をすべきか、どんな取り組みが有効なのかを常に考えているし、きちんと情報を提供すれば、身を乗り出して聞いていただけます」

これまではDPCデータの分析が難しかったり、分析に膨大な手間を要したりと、現場の要望に応えきれない面があったが、「セコムMASH」の活用が浸透しつつある現在、新潟県立中央病院の経営改善は新たな段階に進もうとしている。



経営課医事企画員の服部智さん